ごん吉くんレポート
～南吉よもやま話～

第48回

新美南吉と岡谷の画家②
野村 千春

先回の武井武雄に続き、今回も長野県岡谷市出身で新美南吉とゆかりが深い画家をご紹介します。南吉の恩人ともいえる巽聖歌の夫人・野村千春（明治41～平成12）です。

千春は岡谷の豪農武居家の次女として生まれました。大正14年に地元の高等女学校卒業後、親の反対を押し切って上京し、洋画家・中川一政の内弟子として絵を学びます。

暗色の絵の具で塗り潰す中から、草花の明るく多彩な色が浮かび上がる画風を、師の中川は「いぶし銀の下から輝いてでてくる色彩」と評しました。昭和28年には、男性中心だった美術団体春陽会で2人目の女性正会員になっています。

上京後、同郷の彫刻家・武井直也から彫刻も学びました。その際、彫刻のモデルとして紹介されたのが巽聖歌で、二人は昭和7年9月に結婚しました。

岩手県生まれで千春より3歳年上の巽聖歌は、『赤い鳥』誌上で北原白秋に激賞された若手童謡詩人のホープでした。当時、中野区上高田に家を借り、昭和7年春から東京外国語学校に入学した南吉と暮らしていました。結婚後、南吉は近所にあった東京外語の寮に移りましたが、夕食をご馳走になったり、繕いものをしてもらったりと、頻繁に出入りしては千春の世話になっています。

南吉の日記には、自然の中に美しさを見つける鋭い眼や、生まれてくる我が子のために着物や布団を仕立てる様子など、芸術家であり母である千春の姿が書き留められています。時には南吉が絵のモデルになることもありました。

昭和8年12月27日、中央線回りで半田へ帰省することにした南吉は、途中で岡谷に寄り、千春の実家に泊まっています。

未明に起きて信州への旅立ちをした。（中略）巽の奥さんの実家武居忠内さんの家もすぐわかった。妹さんがいたので、それでなくてもおっとりした人気の家だったが、救われたような気がした。ねる前、前の山にのぼって星を見た。（日記）

一族の祠がある山の上からは、十日夜過ぎの月明りの下、凍りついた諏訪湖や冠雪した八ヶ岳の山影が望めたはずです。実はこの前日、南吉は東京で「手袋を買いに」を書いています。もしかしたら、作中の美しい雪の描写は、信州の雪景色を想像して書いたのかもしれません。

東京外語卒業後、東京で就職した南吉は昭和11年秋に喀血して倒れています。この時、献身的に看病してくれたのも千春でした。

南吉にとって千春は、親しい姉のような存在であり、かつ芸術家として刺激を与えてくれる大切な人だったのです。

新美南吉記念館　遠山 光嗣

野村千春（提供：岡谷美術考古館）

みなさんの声を聞かせてください アンケート

Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。

Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。

Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あ て 先

〒475-8666
東洋町2-1　企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp

編集後記

みなさんは、肩こりしていませんか。私は最近肩こりがひどく、カチカチで困っています。

肩こりは、普段の姿勢が関係しているそうです。デスクワークなどで、長時間同じ姿勢でいる場合には、こまめに肩や首を回したり、軽いストレッチなどをするといいそうです。適度にストレッチをして、仕事の質を高めていきたいです。

みなさんの肩こり解消法も、ぜひ教えてくださいね。

（浅野）

編集・発行　半田市企画課　〒475-8666 半田市東洋町二丁目1番地　☎0569-21-3111（代表）　FAX0569-25-2180
毎月1・15日発行（5月・8月・12月は月1回）　http://www.city.handa.lg.jp/　Eメール　kouhou@city.handa.lg.jp

UD FONT 見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です。
VEGETABLE OIL INK 植物油インキ使用
印刷　東海通信印刷㈱
情熱、蔵出し。半田市。